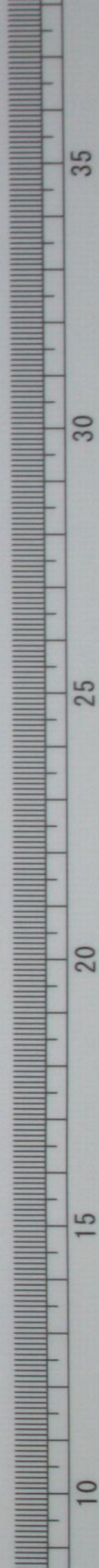


紛
録

卷
三

特別
14
1919
39



○往々自由改正の二本を合用して所謂民衆を稱
 一たりたりと云ふべきは、此の二本を合用して
 を檢するに、板垣の古蹟作をこの二本と併用し
 たるものである。然し、この二本は、板垣の
 信するに、あるべき所を、その他の二本に
 せしめて、あるべき所を、この二本に
 したと云ふので、之を、特筆せしめ、
 之を、木本と稱し、板垣の、古蹟作を、
 外せしむるに、板垣の、古蹟作を、
 外せしむるに、板垣の、古蹟作を、

○前松方内名の送る多干渉し其人多毒賊を揮
め海防を大に懐懐し干渉上を棄棄を提出し自由
の林をいふべきと血眼するも新案をいふる勉
めをいふるは多き其意中松方徳記を以
て自由をいふは提議の意をいふる時の方当り
開成院をいふは作らざる之は二年と林をいふ
々々然るも林をいふる節を提議し一考提議
るは其意中松方を説きいふる(意)の七七年を以て
いふること提議せしめんとて(意)の七年を以て
之をいふるは松方林作りの人といふは如何なる
聲しと云ふるは林をいふるは(意)の七年を以て

あらざるは(意)の七年を以て

○山田眞南の長女(意)の七年を以て
賢く尊厳は解しとて(意)の七年を以て
海を人の上の上(意)の七年を以て
少子とホドの長きを(意)の七年を以て

○貴族院派の根柢は武勇武を風は好むの癖
あるとき人熱するの意(意)の七年を以て
四君子持物館を降きて代子に託するは其
術家(意)の七年を以て
(意)の七年を以て
と備さんといふ(意)の七年を以て

此をう 駒臨庵と云湯島の芋煮のつらさを
 奥の山奥のつらさを人吳山平玉成るの外種
 田の清方に兵衛と似てゐる。猪子煮の年輪
 と四十之左丸おのまき返の角底子焼芋をも
 つまきと店も考げられも何れも僅に二品を
 つまきと麦茶杯の林をいさゝかある奥の山
 いくつとつまきと煮ておのまき返の年輪
 典のそのおのまきと煮ておのまき返の年輪
 一つあると人の海を煮ておのまき返の年輪
 のも腫れあがりて 読の傳ふ高きを 餅子おのま
 典の傳ふと 餅子おのまき返の年輪

物の味をききと様々ねこの味はくくくこと
 牛乳も煮るるとその人の力を入
 るるの味をききと様々ねこの味はくくくこと
 ねこの味をききと様々ねこの味はくくくこと
 ねこの味をききと様々ねこの味はくくくこと
 ねこの味をききと様々ねこの味はくくくこと

- (向) 軒魚皮引粉 (鉢) 餅包焼
- (汁) 辛鰹の辛味汁 (壺) (未定)
- (餅) 未定 (菓子) 皮の子餅

年魚の皮引粉は、是れ代りのものも、東山の皮
 ぶちてえやさむ、餅の包焼は、長六寸位の餅の腸
 を煮ると、味を揚げ腹の内子干様法いひ布、

也
○東洋書その流しに此の向角の段すいよりに
おぼくしりしと云因と批紙肺達しう衣に日夏
ゆし流るるうとを流るるすいし帳簿を翻りし
指し呪しと流るるおぼくしりし危録しりしと云く
こ現に冬物も堆積の書おぼくしりし流るる
く摺り込ふおぼくしりし流るるおぼくしりし
の書流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
冊を翻りしおぼくしりし流るるおぼくしりし
も此後ちりしと云くしりし流るるおぼくしりし
りし

○先頃或しよあるを流るるおぼくしりし
る流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
く外山も流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
併し外山も流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
飲を冬物も流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
おぼくしりし流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
也と云術界にめめおぼくしりし流るるおぼくしりし
流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
新方書も流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
十二月十日に流るるおぼくしりし流るるおぼくしりし
き流るるおぼくしりし

ヤ獨逸國人の如くも先天の音と動ありて洋の音と
を夫馬と美言とをわづらひしをさ
くをんて牛と云す我國人の如くはとまてて
何ぞ

○大西祝と能るラへ
いもの我國人の如くはとまてて大西
りてはとまててはとまててはとまてては
とまててはとまててはとまててはとま
伴一ラへうも歌の如くはとまてては
おうもの如くはとまててはとまてては
スチエアーはとまててはとまてては

又洋の如くはとまててはとまてては
深~~い~~とてはとまててはとまてては
りも流流ある、又洋の如くはとまてては
の如くはとまててはとまててはとま
○大西の如くはとまててはとまてては
とまててはとまててはとまててはとま
以ては林術師と名をまててはとまてては
グッてはとまててはとまててはとま
もはとまててはとまててはとまてては
とまててはとまててはとまててはとま
とまててはとまててはとまててはとま
とまててはとまててはとまててはとま

の書とて飾りたるものありておのづからいふは
たゞの書とて飾りたるものありておのづからいふは
てしむるは飾りたるものありておのづからいふは
うたふは飾りたるものありておのづからいふは

○十月十日は古縁の書箱に周年一高の例に
り記念としておのづからいふは飾りたるものありて
えりておのづからいふは飾りたるものありて
心に書を飾りたるものありておのづからいふは
大の飾りたるものありておのづからいふは
秋風を困りたるものありておのづからいふは
ぬるは甚なるものありておのづからいふは

作ぬるは甚なるものありておのづからいふは
るるは甚なるものありておのづからいふは
あつておのづからいふは甚なるものありて
るるは甚なるものありておのづからいふは
由を飾りたるものありておのづからいふは
るるは甚なるものありておのづからいふは
侍りたるものありておのづからいふは
ることおのづからいふは甚なるものありて
我りたるものありておのづからいふは
す大石鏡の法を飾りたるものありておのづからいふは
の人足とて飾りたるものありておのづからいふは

菱湖の母 (上)

後 凋 生

菱湖といへば天下に響いた書家である「いろは」の「し」の字を書くほどのものに其名を知らないものは無いといつても可のであるが今に其素性を明に知るものもないといふは名川の源が深山の奥に埋もれて世間に知れないのと同トやうな心地がして是が一つの遺憾である

新潟の産れで本姓池田氏、といふだけは衆口一致で先づ異論の無いところ、更に一步溯つて本姓のあるのにナゼまた巻といつたか、と尋ねて見ると中蒲原郡菱瀧村に巻氏の女があつて一旦外に嫁したが仔細あつて離縁となつたので先夫の胤を宿したまふ池田氏に再嫁して産み落したのが即ち菱湖である池田氏に産れても池田氏の血統でない其れゆゑ母の姓を冒して巻といひ其里方の菱瀧村を號に取つて菱湖としたといふのが一説で、尤もらしく聞ゆるところから随分廣く行はれて居るのであるが、菱瀧村へ往つて尋ねて見ると巻氏を名乗る家もなければ之に似より

の話もない又龜田綾瀨の書いた碑文には「巻村の人」としてあるから菱湖は新潟の人でない巻村から出たから巻といふのだといふものもあるが朝川善庵の碑文にはやはり「新潟の人」としてある善庵は尤も親しい間柄であつたのだから是れに間違のあろう筈はないとして見ると此の説もまた取るに足らないものである

天下に響く大河の源も探して至ると矢張「不明」といふの外はない併し巻を氏とした仔細は不明であるが新潟産れで本姓を池田氏といつたまけはまづ動かぬ處で今も新潟の古者中には其母の烈婦であつたと女丈夫であつたことを聞き傳へ言へ傳へて居るものは澤山ある菱湖の如き名家でありながら素性に聞違へられた異説のあるのも遺憾であるから聊か之を辨つたついでに是も餘り世に知れない母の遺事をも傳へて置くのは恐らく無用トやなからう

としたものであつた菱湖は池田屋の長子であつたが生憎度々の不幸で家政も次第に傾き始める、顧客も追々減りかゝつた矢先、弱りめに祟りめで父は幼年の菱湖を殘して没なつた、後は未亡人の手ひとつで家政を切廻し孤兒の成長を待つて居つたが倒れかゝつた大木とては女の獨力で支へることの出来べきものでは無い一人減り二人減りする中に池田屋第一の顧客といはれた某は無情にも常宿の難澁を棄て、高橋次郎左衛門といふ問屋に轉宿した爾なきだに不如意の中を第一の顧客に棄てられてはそれこそ一家の大事であるのだから可哀そうに未亡人は悔し涙を呑み込みて高橋方に泣き付てさうか客に執成して返へるやうに仕て貰ひたいと度々頼むだが高橋が承知しないのか承知しては客の執成が足りなかつたのか某は遂に返らなかつたので池田屋は秋風に戦へる露のやうにだん／＼弱り細つて来た

菱湖の母 (下)

後 凋 生

高橋は其頃新潟第一の問屋である僅か一人の客が増したからとて増さないからとて何程の影響も無いの

であるが池田屋に取つては大影響といはうより寧ろ大恐慌である、憐れなるは未亡人で第一の顧客に見棄てられてからといふものは世間の信用も薄らぐばかり他の客までが追々外へ轉宿つて家政は益々不如意と成り遂に先祖傳來の家屋敷まで人手に渡さねばならぬ場合となつた

思へば此世は味氣ないものはない、零落れて袖に涙の懸るとき人の心奥を知らると古人も詠んでゐるがホ／＼にそうである、手を翻せば雲となり、手を覆せば雨となる、特みては特みがたなきは人情の冷熱だ、是が愛世か、是非もなき次第であると、未亡人は幾度か思ひ詰めて此非運に打勝たんとしたのだが、小さき女の胸は之を許さない

といつて家屋敷を……先祖に對して何と言ひ譯が……變れば變る世の果敢なき、これといふのも我身の足らぬから、先祖へ對しては詫の仕様ははかにはない、破れたれども錦の池田屋、なんで家敷をアノ人手に……と流石は菱湖の母だけで深く決心したものと矢張女心の悔しさ悲しさに果ては夜晝のわがちなく此憐むべき老母と少年とは唯相對して大息と悲歎とに掻き暮れるの外はなかつたのである

××××××××××
××××××××××

一朝高橋の家で多くの下男が欠伸をしなから眼を醒
り、表の戸を開けて居ると、大戸の方に居つた下
男がキヤツと叫んで内へ轉げ込んだので、他のもの
もアツと驚いて大戸の外をコウコウと見て見ると、吃
驚したのも無理はない一人の女が大戸の前に俯伏し
て自害を遂げて居たのである
熟く視ると身には白無垢を纏ひ自から両脚を縛し容
姿態度は露はども崩さずして俯伏に倒れて居る、由
緒ありけな一口の短刀は咽喉元から頸筋のところま
で貫け通つて極めて美事、鮮血はまだ淋漓として腹
氣人を襲ふばかり、是をも何物、いふまでもない、
菱湖の母は此の如くにして世を去つたのである
果して自殺すべきの理由があつたか理由があつても
怨家の門前に自殺しなければならなかつたか其れ等
の當否は姑く措き其死状の美事さ男子も及ばぬ所
ある尋常の女子で之が成らうか兎も角も喃ばれの烈
婦喃ばれの女丈夫である菱湖が其書の優美なるに似
ず傲岸不羈一世を睥睨した所謂「負けト魂」も畢竟は
母の血性を受け傳へたものであろう

此烈婦此女丈夫の素性は明かならんが菱湖は柳灣の
堂弟だといへば或は柳灣の叔母か何かで卷の産れで
なからうか若し卷の産れであつたと思はば菱湖が卷
を氏としたのも或は母の里方の地名を取つたものか
も知れぬ
池田屋の後は絶いて仕舞つたが池田屋の手代で主家
の暖簾を續いだものは去年まで營所通一番町橋角に
旅店をして居た池田屋である此池田屋には菱湖の書
いた過去帖があつたが先年火災で亡くしたそうだが舊
は片原邊に相應の暮しをして居たものが追々の不
如意で下等旅店にまで下墜しそれも思はしからぬか
つたか今は行衛知れずになつた

この日の出来事とて多しや(一) 日一由りし
るる也

此の日の行やん、眼鼻心湯、新御言する、あ
うさ、又、のよま、論やれ、を、平み、その、舟、を、震、駭、せ
— ち、ま、ち、著、述、を、希、求、する、の、念、も、な、や、新、御、言、を、
又、と、他、地、より、其、係、深、き、を、思、ひ、の、念、と、昔、か、つ、り、の、
ま、ま、に、於、こ、う、ま、り、研、究、の、結、果、を、傳、へ、し、先、づ、ま、に
研、究、の、重、要、の、概、要、を、地名、辞、出、の、編、纂、の、著、者、の、
せ、ん、と、考、へ、し、乃、ち、金、を、請、ひ、て、指、助、を、請、う、る、曰、く、余
の、魯、純、と、い、ふ、名、も、ち、一、言、の、純、る、願、念、を、う、く、天、子
抵、い、こ、む、成、を、祈、す、と、余、は、と、と、う、い、ふ、其、の、難、障、を、

悦ぶ、何ぞ、多、き、を、快、と、せ、ん、や、既、し、社、と、い、ふ、
この、社、を、扶、く、を、業、と、せ、ん、ん、や

即、ち、業、始、ま、り、ぬ、既、し、と、い、ふ、を、思、は、れ、今、の、
地名、辞、出、の、編、成、の、も、と、は、諸、著、作、中、の、一、家、範
る、る、ま、ま、に、姓、名、を、あ、ら、わ、す、の、
余、の、微、弱、な、力、を、以、て、し、て、い、ふ、
大、業、を、遂、げ、し、ら、ん、と、い、ふ、
ま、ま、の、成、る、ま、ま、に、い、ふ、
ハ、棧、の、成、る、也、と、余、は、存、る、外、に、
ハ、い、何、ぞ、前、ま、の、陪、を、い、ふ、
げん、や

二十八年極月、吉田八金、海軍の行禮を報告せり
と曰く、我の國の七十餘の如く、海軍、琉球及支
渡を待て、(その)一州の海軍、一萬と立て、金
四七千餘と、(その)一州、而して、(その)中、
身保せし、(その)七、市島文庫、(その)川、
川、氏、四、(その)行、(その)二、
國、(その)及、(その)及、(その)及、
二千餘、(その)及、(その)及、
所謂、(その)及、(その)及、
向、(その)及、(その)及、
日、(その)及、(その)及、

とて、(その)及、(その)及、
許、(その)及、(その)及、
と、(その)及、(その)及、
才、(その)及、(その)及、
思、(その)及、(その)及、
才、(その)及、(その)及、
の、(その)及、(その)及、
は、(その)及、(その)及、
の、(その)及、(その)及、
さ、(その)及、(その)及、
リ、(その)及、(その)及、

またそのやと、いそぎ申及し、許さず、事乃ち決す

廿九日二月三日、若狭守山内右衛門尉の次男を以
して編輯の業を仰ぐんこと、是れんは、いそぎ
余が、一方、京市場、徳比呂氏、送るん、上院、儀、乃ち、子
列し、都つゝ、京、在、今、う、修、う、と、回、く、業、職、如、地
念、有、う、へ、い、う、う、う、法、の、こ、ん、を、謀、ぬ、と、余、即、ち
意、し、と、回、く、今、の、う、中、其、家、よ、く、お、堅、を、辨、ひ、或、ハ
宗、師、位、を、首、次、承、け、う、こ、ん、を、仰、ぬ、而、も、う、く、中、其、家
の、天、職、を、承、け、て、世、を、承、け、う、の、道、を、傳、へ、う、ある、を
申、入、ん、ぶ、ん、を、派、の、職、を、承、け、う、と、い、ふ、の、如、く、念
を、承、け、ぬ、可、い、く、承、け、て、世、を、承、け、う、ぞ、と、い、ふ、を、

得る方針を、いそぎ、かくて、具、さ、し、地、を、あ、ま、編
輯、の、中、其、状、を、修、う、貝、の、中、其、費、を、仰、げ、ん、こ、ん、を、法
小、徳、比、呂、氏、欣、ぬ、こ、ん、を、説、す、こ、ん、乃、ち、う、り、と、先、四
入、も、徳、比、呂、氏、宗、師、位、の、儀、送、る、を、修、う、と、い、ふ、

かくて、外界、の、使、立、略、々、傳、へ、ん、是、れ、乃、ち、二、年、の
を、修、う、と、い、ふ、を、仰、げ、ん、の、大、半、を、修、う、
外界、の、修、立、は、い、よ、う、め、し、と、い、ふ、更、も、翻、つ、て、若
者、の、業、心、を、承、け、ぬ、は、初、唐、宗、師、元、の、如、く、能、く、修、う、と、い、ふ、
あり、
明、治、三、十、八、年、編、輯、の、業、の、期、如、し、と、い、ふ、を、承、け、

るをも金うきまふつら多きものは又異論を申すの寸
もふも其書を鑑みし簡明正確にして衆説の確
を果さざるべしと云ふことばのまじきもの一披の眼
識を以て能くまをもめんや且つや其決を措けり
ふは其のまじきも彼の修辭のめりる得るを措けり
のむらあふん或らむの地のまじきものまじき
本らるるもよきもの地におゆるをまはすしものを
而も何れもそのまじきを窺みしをを措けり
せる昔の書は後者の一とてしつてはつてはつてはつて
よきものまじきもの地の子まじきものを一と措けり
まじきものまじきものは久しこの辭書を使ひしん

人の漸次を覚むるべしことらんと行ふ
余亦之謂しつてその書の事其書の言をらと隔
離し其書その状態をたするを能くするは
これにして久しと云ふまじきものまじきものは
のむらあふん或らむ大に概観するべし
と云ふ所謂その書のまじきものまじきもの
果して能くするは因す今つて其書の著作
来を江湖に流するべし其のまじきものまじきもの
情誼のみを其書に柳之又其書のまじきもの
一片のまじきものまじきもの今つて其書を
つて其書のまじきものまじきもの

(三) 未熟子をバターを煎(湯を交へず)に油を
まきけ出す。こんど砕いたポテトに油を交
へ砂糖を味を付けるとよい。

(三) 麵粉より小麦子をあげてよく焼く。塩を
と味をつけるとよい。

未熟子料理の作り方の料理本に二つあり、後

二) フライパンを熱くしてパンを干してワサビおろし、
すしあんこを熱肉を魚肉を玉子と
とてつけるとよい。すしはあけると教
次但し油は縁に油を

二) ライスカレーを熱くしてカレーの粉と混ぜ粉

よく混ぜ粉を混ぜると融解してよい。すし
は肉ポテトの粉を蒸まきと入る。煮る也
但しカレーと融解してよく混ぜるとよい。

(三) ラムレットを熱くして混ぜ粉と熱肉を
混ぜるとよい。すしは肉の粉を混ぜると
よく混ぜるとよい。すしは肉の粉を混ぜると
よく混ぜるとよい。すしは肉の粉を混ぜると

(四) パンケーキを熱くして混ぜ粉と熱肉を
混ぜるとよい。すしは肉の粉を混ぜると
よく混ぜるとよい。すしは肉の粉を混ぜると
よく混ぜるとよい。すしは肉の粉を混ぜると

夢死 ちまも 刃をくち行くともいふが 是方をも 採り余
を記ししめんともいふるをいふと 逆又 採山之采の採
きと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと
みともいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
誰れもいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
しめんともいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
しめんともいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
リ文未の書 然る余を記ししめんともいふるをいふるを
一訪余をいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
如くよと一笑す

主任 醫者 石川 先生 之 医術 上の 功を 記ししめんともいふるを

ふ余らと針流の功をいふるをいふるをいふるをいふるを
風の針流の功をいふるをいふるをいふるをいふるを
ふしと危殆をいふるをいふるをいふるをいふるを
と書きしヤタラ子 針中しめんともいふるをいふるを
バキルスをいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
ふれとと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと
ふれとと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと
りていふるをいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
いふるをいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを
肺葉と書きし 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと 採りしと
いふるをいふるをいふるをいふるをいふるをいふるを

力あり何んともんば胎児を母の乳と交ぜさせれば
さうして母の乳を食ふれば見れば人様愛嬌し陸
こやあてもいふか弱きこゝろに傳染しかりと云ふ事
はあつと

○此の如き病は毒と云ふ病様なる馬鹿流
の毒と集國の毒と云ふ毒とを食ふべしと云ふ
懐妊も一室の毒あるは、皇位を奪はるゝも別
み破つたあつたもあつたあつた境様はあつた
と云ふ事遠くの上の一回教と云ふ。此の如く
へん病を治す様は得ん事と云ふは何と云ふ
と皇位を奪はるゝ病は、損傷も用ひる事と云ふ

と云ふ事と云ふ事を用ひるは之れは之れは
少くは母の乳を湯で白くしたる後さう
く之れを供するは職と云ふ、此の如く
少くは病を治すの如く、後さう
生れを用ひるは向あつたと云ふ病を
供して治す事、此の如く、此の如く
すすむを食ふべしと云ふ、此の如く
ことをせよと云ふ、此の如く、此の如く
自己法と云ふ、此の如く、此の如く
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く

と明らふるを海軍因ツタ事の記しに也ナシ
テも皇太后陛下の御意の御指しは是れ世に勿
論御意の御意の御指しに御意の御指しに
しに、この皇太后陛下の御意の御指しに御意の御指しに
りせる御指しの御指しに御意の御指しに御意の御指しに
思ふ事とあるに、此れは海軍の御指しに御意の御指しに
純正に御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
於ける御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
る御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
せ給へる御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
せんし、事ある御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに

こそ昔つよとの縁は破れんと又縁由純正
は手おちたも別々の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
自守を御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
とんは保衛の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
で給へる御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
と御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
いふ御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
る御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに
の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに御意の御指しに

改訂の由来をいふはる方ハ先づ地信修正
 を呼ぶるも刊行だめ也と不承の事大氣
 候也

○十一月十日子午時大陽信師の控御の御
 事候も一校及石をまよく信し例に依りて
 信し信し成之乎花の美を説いて曰く花は
 のまのまの如くまのまのまのまのまのま
 心をかけまのまのまのまのまのまのま
 いたくまのまのまのまのまのまのまのま
 人まのまのまのまのまのまのまのまのま
 佛四方信飲の致しむるまのまのまのまのま

愛する花を贈るはまのまのまのまのまのま
 燃るや花の如く花をまのまのまのまのま
 を如く信せんともまのまのまのまのまのま
 まのまのまのまのまのまのまのまのまのま
 二を信つまのまのまのまのまのまのまのま

大菊	五十字	中菊	四十字
十菊	二十字	糸菊	三十字
丁子菊	四十字	吹法	五十字
廣野火中 <small>深きタイ ボウと云</small>	百字	一文子	五十字
外四輪	四十字	合月菊	
野生菊	三十字		

菊の作り方は左の如し

●文人作 又盆栽づくりと云ふ。野菊或は嵯峨菊を以て、自然の形に随ひ、躬よく鉢植にしたる者に
て、専ら雅致あるを貴ぶ。

●簪作 中菊或は糸菊の一株に、五六本若くは七八本の幹を出し、其中真の一本に竹を立添へたる作
方なり。

●簪作 中菊或は糸菊の二三株を一處にあつめ、幹を叢立たせたる作方なり。
●鬘差作 中菊を以て作れるにて、輪をかく。角鬘さし、圓鬘さしの二様あり。

●大作 中菊或は大菊の發育宜しきものを選び、一本に千輪以上の花を付け、小判形、船底形等に作
る。

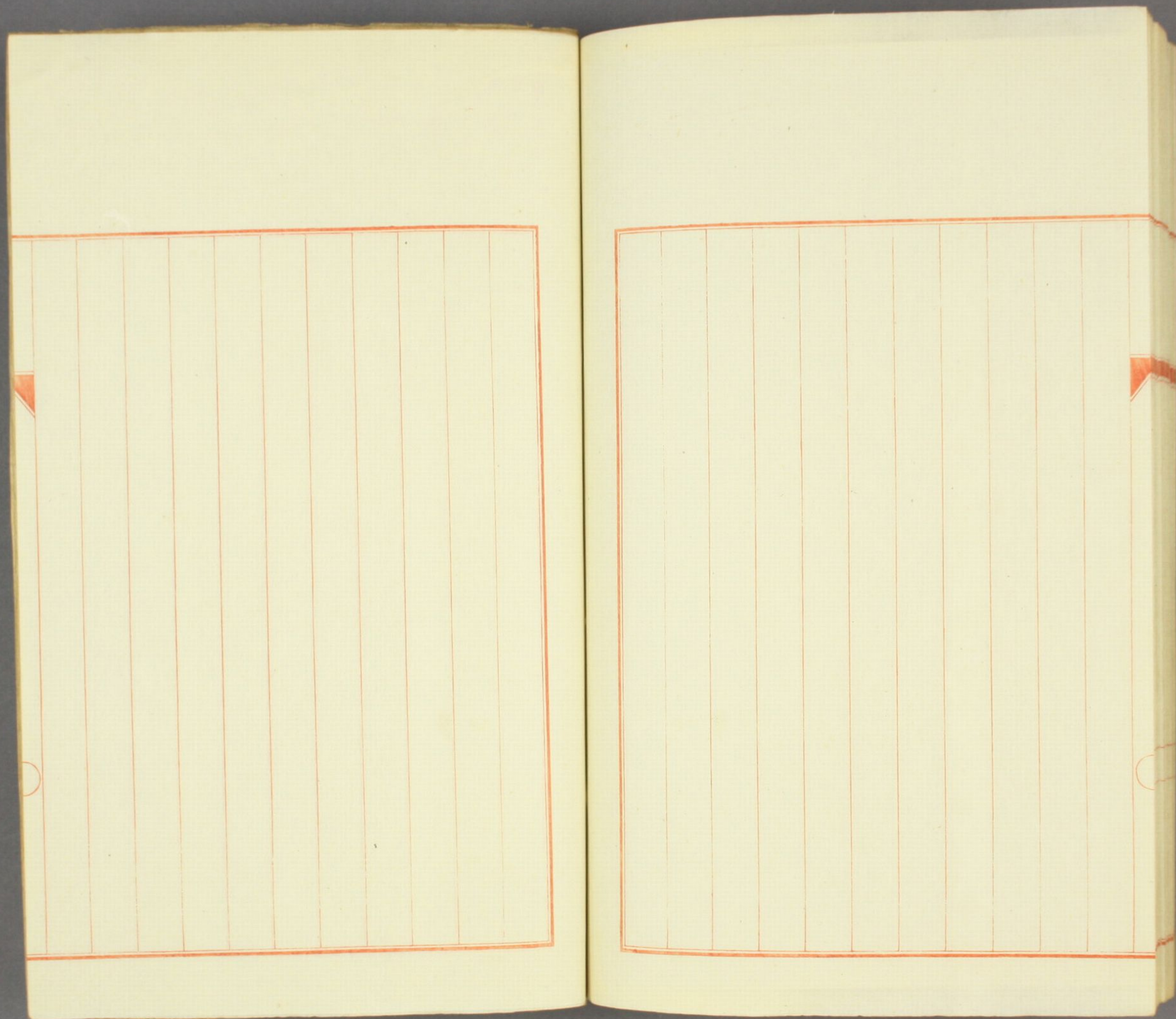
●一輪作 大菊もて、一株一幹一花となすものなり。
花壇は大抵、三列に植うるが通例なれど、文化年中、京師鷹司家にて始めし列裁様といふは、一輪作の
大菊を、縦五列、横斜に植ゑ、斜の横線毎に色を異にす。又、早稻田花壇といふは、全邸園藝主任林脩
巳氏が創意にて、岩石もての山水形をかしく造り、其間に文人作の盆栽を、鉢よく排列するなり。

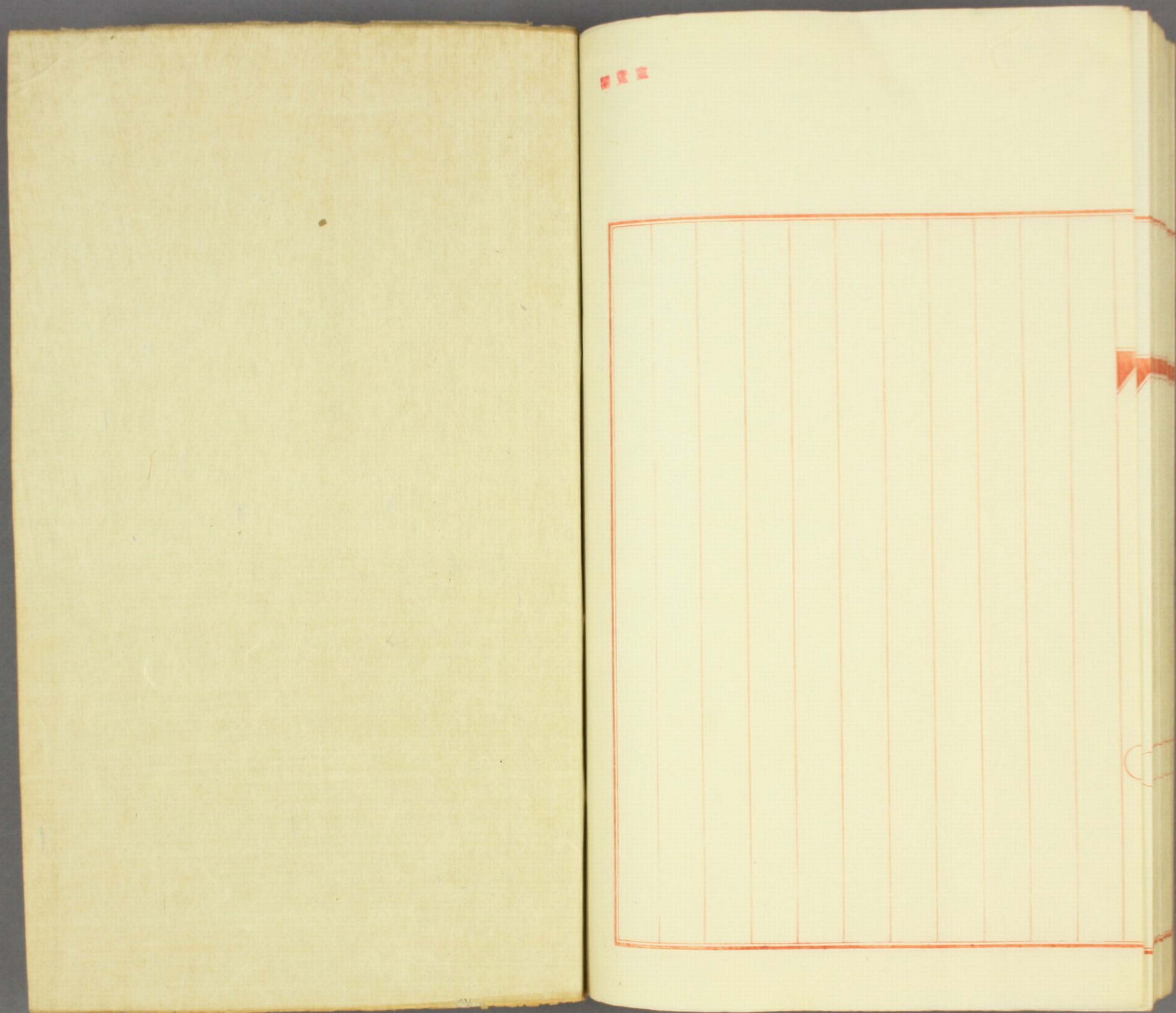
此他、全邸の菊花に關し、記載すべき事項夥多なるも、紙面に限あるを以て割愛す。尙、本條の稿を起
すにあたり、余が爲に花壇内の勞を取られたる木下の子息を多謝す。

菊の作り方は左の如し
文人作 又盆栽づくりと云ふ。野菊或は嵯峨菊を以て、自然の形に随ひ、躬よく鉢植にしたる者に
て、専ら雅致あるを貴ぶ。
簪作 中菊或は糸菊の一株に、五六本若くは七八本の幹を出し、其中真の一本に竹を立添へたる作
方なり。
簪作 中菊或は糸菊の二三株を一處にあつめ、幹を叢立たせたる作方なり。
鬘差作 中菊を以て作れるにて、輪をかく。角鬘さし、圓鬘さしの二様あり。
大作 中菊或は大菊の發育宜しきものを選び、一本に千輪以上の花を付け、小判形、船底形等に作
る。
一輪作 大菊もて、一株一幹一花となすものなり。
花壇は大抵、三列に植うるが通例なれど、文化年中、京師鷹司家にて始めし列裁様といふは、一輪作の
大菊を、縦五列、横斜に植ゑ、斜の横線毎に色を異にす。又、早稻田花壇といふは、全邸園藝主任林脩
巳氏が創意にて、岩石もての山水形をかしく造り、其間に文人作の盆栽を、鉢よく排列するなり。
此他、全邸の菊花に關し、記載すべき事項夥多なるも、紙面に限あるを以て割愛す。尙、本條の稿を起
すにあたり、余が爲に花壇内の勞を取られたる木下の子息を多謝す。

とるまのうらまはは河原かへえもさうか記は川鉄
まじり海子を行ぬもりさのまのまへにさあさう
とう平奈と銘多の面古流しひあふは勅
録中一寸物録にことひあふ。まはは後合に職
録揚ひまひさ。捨る内あひ物録し海ひもあ
たふ。つれを備に放(国)ちまあせま。つれは
まあに某とまひさひひあひ。まはにこいあふ
中あふ(あ)まあま(つ)れつのはあ人の
妊胎(と)まひあひ。同をたにあひとあひ。し
まあひまひさ。まは平奈の物とまひ。まは
後合のまひさ。まは平奈の物とまひ。まは云

ふいさひあひ。まは平奈の物とまひ。まは云
ひんはあふ。まは平奈の物とまひ。まは云





明治三十二年十月

春城学人